



研究用試薬

## ヒストファイン

第一抗体

抗免疫グロブリンMモノクローナル抗体(R1/69)

(動物種：マウス)

包装：50テスト(6mL)

Code：413291

製造販売元

株式会社ニチレイバイオサイエンス

〒104-8402

東京都中央区築地6-19-20

TEL. 03(3248)2208 FAX. 03(3248)2243

■特異性及び抗原分布：ヒト免疫グロブリンM(IgM)のH鎖と特異的に反応する。ヒトIgAやヒトIgGとは反応しない。組織中のヒト正常及び腫瘍性形質細胞のIgMを検出できるが、結合組織や血管内にみられる細胞外IgMも同時に染色される。

■クローン名：R1/69

■抗体のクラス/サブクラス：IgG1、 $\kappa$

■製法：培養上清より得ている。

## 1. 内容

第一抗体・・・抗免疫グロブリンMモノクローナル抗体(R1/69)(動物種：マウス)。

液状。

ウシ血清アルブミン(BSA)と、0.1%アジ化ナトリウムを含むリン酸緩衝生理食塩水(PBS)中にて、即時使用可能な抗体濃度に希釈済み。

1バイアル中に6mLを含む。

## \*\*2. 使用目的

組織・細胞中のヒトIgMの染色。

ホルマリン固定パラフィン包埋切片の免疫染色に使用できる。

研究用としてのみ使用すること。

## \*\*3. 使用方法

組織切片の場合、前処理(抗原賦活化)としてヒストファイン 抗原賦活化液 pH9(Code：415201 又は Code：415211)を用いたオートクレーブ処理が必要である(裏面の■操作手順参照)。

スライド上の組織切片が完全に覆われるように第一抗体を2滴(100 $\mu$ L)滴下し、常温(15-25 $^{\circ}$ C)で30分~1時間インキュベートする。この反応時間は、ヒストファイン シンプルステイン MAX-PO(M)を使用する場合の目安であり、他のキットを使用する場合は、研究者自身が至適反応時間を調べる必要がある。

■参考：組織の固定状況等によりヒストファイン 抗原賦活化液 pH9(Code：415201 又は Code：415211)の代わりに10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理をすることで良好な染色結果が得られる場合がある(裏面の■参考参照)。

また、腎生検組織や骨髓穿刺液を前処理することにより、酵素抗体法にて良好な染色結果が得られることがある。この場合、研究者自身が至適抗体濃度、至適反応時間を調べる必要がある<sup>(1)(2)(3)</sup>。

■組織の固定状況等が染色結果に影響を及ぼすため学会等が推奨する固定液や固定時間を遵守し、検体の取扱いには十分注意すること。染色条件を変更することで良好な染色結果が得られる場合があるが、組織へのダメージや偽陽性化、偽陰性化が起こるおそれがあるため、研究者自身の責任において至適条件をよく検討すること。

## \*\*4. 貯法及び使用上の注意

- 2-8 $^{\circ}$ C保存。
- 使用期限はラベルに記載されているので使用前に確認すること。
- 使用前に室温に戻すこと。
- 使用後は速やかに冷蔵保存すること。
- 異なるロットの試薬や他製品の試薬を混ぜたりしないこと。

## \*\*5. 取扱い上(危険防止)の注意

- 使用期限の過ぎた試薬は使用しないこと。
- 本品に関する化学物質の安全情報は安全データシート(SDS)を参照すること。
- 本品を吸い込んだり、眼、口、皮膚、衣類などへの接触を避けること。
- 本品の廃棄の際には、各施設や地域及び国のルールに従い、適切に廃棄すること。
- 本品は、動物由来成分を含むので、取扱いに注意が必要である。
- 本品にはアジ化ナトリウムが含まれている。アジ化ナトリウムは水道管に含まれる銅、鉛との反応によって爆発の危険性があるので、多量の水とともに洗い流すこと。
- ヒト由来の検体は、感染の恐れがあるので適切な取扱い及び廃棄法を用いるとともに、免疫染色を実施するにあたって、関連技術及び操作法に充分習熟しておかなければならない。

## 6. 参考文献

- (1) 濱川真治 他. 腎生検における酵素抗体法の有用性. 病理技術. 1997;56:9-12.
- (2) 濱川真治 他. 当院における骨髓穿刺液の検体処理法の新しい試み. 病理技術. 1998;58:4-5.
- (3) 濱川真治 他. 酵素抗体法による免疫グロブリンの染色に有効な検体処理法. Med Technol. 2000;28:19-20.

## \*\*免疫染色における操作手順及び前処理(抗原賦活化)\*\*

### ■ 操作手順

#### [切片の準備]

1. 50℃で十分に湯伸ばしした切片(3-4μm厚)をシランなどのコーティングスライド上に貼り付け、37℃の恒温器内で16時間以上乾燥させる。

#### [脱パラフィン]

2. 脱パラフィン → 親水化 → PBS

#### [抗原賦活化処理]

3. 前処理(抗原賦活化): オートクレーブ処理
  - ① 調製した抗原賦活化液(下記記載)を耐熱性の染色バットに入れ、スライドを浸漬させる。
  - ② 染色バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
  - ③ 120℃、20分間オートクレーブ処理する。
  - ④ 圧力が十分下がった後、染色バットをオートクレーブから取り出し、蓋をはずす。スライドを浸したまま常温(15-25℃)で20分間放置しゆっくり熱を冷ます。  
※オートクレーブ処理後は、染色バット及び抗原賦活化液等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用して火傷に注意する。
- ⑤ スライドを抗原賦活化液から取り出し、PBSで洗浄する(洗浄用容器を2度かえ3分間の洗浄操作を3回繰り返すか、又は洗浄びんを使用する)。

#### [染色手順] <ヒストファイน์ シンプルステインMAX-PO(M)使用の場合>

- |                            |             |   |              |
|----------------------------|-------------|---|--------------|
| 4. 内因性ペルオキシダーゼの除去          | 10~15分間/常温  | → | PBS洗浄        |
| 5. 第一抗体の添加・反応              | 30分~1時間/常温  | → | PBS洗浄        |
| 6. シンプルステインMAX-PO(M)の添加・反応 | 30分間/常温     | → | PBS洗浄        |
| 7. 基質溶液の添加・反応              | DAB発色       | → | 水洗           |
| 8. 対比染色                    | 核染(ヘマトキシリン) | → | 封入 → 乾燥 → 検鏡 |

### ■ 注意

- ・「PBS洗浄」は5分間ずつ容器を2度かえるか、又は洗浄びんを使用する。
- ・4.のプロセスは3.の前に行ってもよい。
- ・ヒストファイน์SABキットを使用する場合は上記1.~4.まで行いSABキットの操作方法に従って染色を行う。
- ・抗原賦活化液  
「抗原賦活化液pH9」の調製方法

- ・ Code : 415201 抗原賦活化液pH9 (調製済)は、そのまま用いる。
- ・ Code : 415211 抗原賦活化液pH9 (10倍濃縮)は、精製水で10倍希釈する。

### ■ 参考 : 10mMクエン酸緩衝液(pH6.0)、オートクレーブ処理を用いる場合

- ・ 10mM クエン酸緩衝液(pH6.0)の調製方法

A液 9mL+B液 41mL+精製水 450mL(用時調製)

A液 : 0.1M クエン酸水溶液 : 常温で保存可能  
クエン酸一水和物 (C<sub>6</sub>H<sub>8</sub>O<sub>7</sub> · H<sub>2</sub>O) 2.1g/精製水 100mL  
B液 : 0.1M クエン酸ナトリウム水溶液 : 常温で保存可能  
クエン酸三ナトリウム二水和物 (C<sub>6</sub>H<sub>5</sub>O<sub>7</sub>Na<sub>3</sub> · 2H<sub>2</sub>O) 14.7g/精製水 500mL  
ここから必要な時に調製する。